

[翻訳]

秋瑾詩詞全釈 (その三)

吉川 榮 一

Explanatory Notes on The Whole Poems of Qiu Jin < 3 >

Eiichi YOSHIKAWA

要旨

Qiu Jin (秋瑾 1875-1907) is well known as a prominent female revolutionist of modern China. She is also a female poet representing the Qing (清) dynasty last stage. This paper is the third part of Chapter 1 in a series of trials which introduces all the poetry of Qiu Jin to the order which she created. I add notes and an interpretation to all the works of Qiu Jin.

In this part, I am treating the poetry created around 1895 when she lived in Xiangtan (湘潭) where her father worked as a local bureaucrat. Those days, she was 19-21 years old. As she married in spring of 1896, it can be said that these poetry is the works created at her last maiden days.

キーワード 秋瑾

前言

秋瑾の詩文を集めたものとしては、一九〇七年に刊行された王芷馥編『秋瑾詩詞』以降、数種が世に出ているが、今日もつとも信頼に足るテキストとしては、それまでに出版された詩文集を基礎に遺漏を補い、一九六〇年にまず中

華書局上海編輯所から出版され、その後さらに修訂を経て一九九一年に上海古籍出版社から刊行された『秋瑾集』である。

近年になって、『秋瑾全集箋注』（郭長海・郭君兮輯注、吉林文史出版社、二〇〇三年）、『秋瑾選集』（郭延礼選注、人民文学出版社、二〇〇四年）と、立て続けに秋瑾の注解付きの詩文集が発行されるにいたった。両者とも拠り所としているのは『秋瑾詩詞』以来の数種の詩文集であるが、惜しむらくは、いずれの選集も完全な編年による編集ではない。収録されている詩について見ると、近著二書のうち『秋瑾選集』は、「第一期 出国前」「第二期 留日時期」「第三期 帰国後直至就義」の三期に大きく分けられているものの、それぞれの時期のなかに入れられている詩は、必ずしも創作順ではなく、特に第一期はかなり入り乱れているように感じられる。一方の『秋瑾全集箋注』は、編年体ではなく分体による編集であり、秋瑾の好んだ詩体を窺うには便利であるが、秋瑾の詩作がどのように移り変わっていったのかを窺うことはできない。同書はそれぞれの詩について創作時期を推定しているものの、同書の推定創作時期は必ずしも『秋瑾選集』と一致していない。

拙稿は、上海古籍出版社版『秋瑾集』を基礎とし、近著二点を参照しながら、秋瑾の全詩作をできる限り創作された順に復元しつつ注釈を加えようとする試みであり、『文学部論叢』第八七号、第九〇号掲載の「秋瑾詩全釈初稿（その一）」「秋瑾詩全釈初稿（その二）」に続き、結婚を控えたころの二十歳前後の詩を取り上げる。

第一章 少女時代（三） 湖南省湘潭時代

秋瑾は、一八八九年の末に原籍地の浙江省紹興に初めて戻り、この地で三年余りを過ごしたとされている。その後、一八九三年春には、父親の秋寿南（一八五〇～一九〇二）に従い湖南省長沙に移り、ここで数か月を過ごした。さらに、その年の末頃に、常德を経て、湘郷、湘潭へと住まいを移している。一八九三年の末から湘潭で暮らすようになった秋瑾は、一八九六年の春、湘潭の富商・王黻臣の第三子・王子芳と結婚している。本稿で扱うのは、秋瑾が長沙から常德を経て湘潭に移り住み、王子芳と結婚する頃までの作品である。一八七五年生誕説に従えば、秋瑾が十九歳から二十一歳の頃に当た^(注)る。

登宜月樓

住久由來渾是家

異鄉容我傲煙霞

數聲短笛臨風晚

露濕天桃月影斜

住^とまること久しければ 由來 渾^まて 是^これ 家

異鄉 我に 煙霞に傲^むるを容^{ゆる}す

數聲の短笛 風に臨みて晚^くる

露は天桃を濕し 月影 斜めなり

この長沙にしばらく暮らすうちに、私の家郷のように感じられてきたわ。異郷ではあるけれど、私にゆつたりとして気持ちで美しい景色を眺めさせてくれる。短い笛の音が風に乗って途切れ途切れに聞こえてくるこの夕べ。いつのまにか夜露が感じられるようになり、月の光が斜めに差してきた。

○宜月樓 長沙にあった樓閣の名か。○傲 何物にもとらわれず、悠々と楽しむさま。○煙霞 もやかにかすむ景色。山や川のある美しい景色。○臨風 高いところで風に向かって立つ。○天桃 若くしなやかな桃。ここでは、『詩経（周南・桃夭）』の「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸」を踏まえ、年若い娘である秋瑾自身を指している。

去常德舟中感賦

一出江城百感生

論交誰可並汪倫

多情不若堤邊柳

猶是依依遠送人

一たび江城を出づれば 百感 生ず

交はりを論ずれば、誰か汪倫に並ぶべけんや

多情 堤邊の柳に若かず

猶ほ是れ 依依として 遠く人を送る

いまこうして長沙を離れてみると、さまざまな感慨が心に浮かんでくる。

友情ということを考えれば、誰もかの汪倫には及びそうもないことだ。

情愛の深さでは、（人は）土手の柳に及ばないわ。

柳の枝だけがいつまでも名残惜しそうにゆらゆらと枝を揺らし、遠くに旅立つ私を見送ってくれている。

○秋瑾の父・秋壽南は、一八九三年、常德厘金局総辦に任じられ、一家を挙げて長沙をあとに常德に向かった。この詩は、見送りに来てくれる人も余りいない旅立ちの寂しさを詠ったものである。○江城 長沙を指す。長沙は湘江沿いにあることによる。○百感 万感。さまざまな感慨。○汪倫 李白「贈汪倫」の「桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情」を踏まえたもの。汪倫は李白の旅立ちを心を込めて見送った人物。○多情 情愛が深いこと。○依依 木の枝などがしなやかにしなだれるさま。名残惜しいさまをも指す。

残菊

嶺梅開候曉風寒

幾度添衣怕倚欄

殘菊猶能傲霜雪

休將白眼對人看

嶺梅 開く候とま 曉風 寒し
 幾度いくたびか衣ひを添つくはふるも 欄よに倚よるを怕おそる
 残菊 猶ほ能く霜雪よに傲る
 休やめよ 白眼もて人に對して看るを

大庾嶺の梅の花が咲く頃は、明け方に吹く風はまだ冷たく

どれほど重ね着をしても、欄干にもたれて立つ気にならないわ。

寒さの中いまでも咲き残っている菊の花は、霜や雪にも負けず堂々としていていること。
 そんな残菊を冷淡に見下すのはおやめなさい。

○残菊 初冬まで咲き残っている菊。 ○嶺梅 大庾嶺に咲く梅。 大庾嶺は別名「梅嶺」とも言い、嶺上の南の枝は早くに花開くとされる。 ○曉風 明け方に吹く風。 ○傲 他者に負けず堂々としていているさま。 ○他郷 にあつてまわりの人々になじめぬ自分の姿を
 残菊になぞらえたものか。

春寒

料峭春寒懶啓窗

重簾猶是冷難降

臨風祇有呢喃燕

花外分飛小語雙

料峭^{りょうせう}たる春寒 懶^{もろう}く窗^{まど}を啓^{ひら}く

簾^{れん}を重ねるも 猶^{なほ}ほ是^{こゝ}れ 冷^{さむ}さ降^{くだ}し難^{がた}し

風^{かぜ}に臨^まむや 祇^{ただ} 呢喃^{じなん}の燕^{つばね}あり

花外^{はながら}に分^わかれ飛^とぶ 小語^{せうご}の雙^{ふた}

肌寒く感じられる春先の寒さに、物憂く窓を開けてみる。

二枚仕立てのカーテンをもつてしても、寒さを防げそうもない。

窓から吹き込んでくる風に吹かれていると、燕が囁りながら飛んでいる。

囁くように囁りながら、花の周囲を分かれて飛ぶ二羽の燕が。

○料峭 春の風が肌に寒く感じられること。うすら寒さ。 ○重簾 二重になったカーテンの類。またはカーテンの類を重ねること。

○呢喃 燕の囁り。 ○小語 小声で話すこと。

詠燕

飛向花間兩翅翔

燕兒何用苦奔忙

謝王不是無茅屋

偏處盧家玳瑁梁

花間に飛び向かひ 兩翅 翔る

燕兒 何の用ありてか 苦だ 奔忙す

謝、王 茅屋無きにあらざるも

偏に 盧家の玳瑁の梁に處まる

花のあたりを盛んに飛び回る二羽の燕。

燕よ、どうしてそんなにせわしなく飛び回っているのか。

往年の謝家と王家はすでに没落したものの、その邸宅跡に粗末な家があるというのに、
どうあつても豪華な大邸宅の梁で羽を休めようとする。

○兩翅 二羽の鳥。 ○奔忙 忙しく動き回る。ここではせわしなく飛び回ること。 ○謝王 晋代の大富豪として知られる謝家と王家。のちに没落して、その大邸宅の跡は普通の民家となる。劉禹錫「烏衣巷」に「舊時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家」とあるのを踏まえたもの。 ○盧家玳瑁梁 沈佺期「古意」に「盧家少婦鬱金堂、海燕雙栖玳瑁梁」とあるのを踏まえたもの。盧家は、六朝時代の大富豪

と伝えられている家。玳瑁梁とは、玳瑁から取った鼈甲で飾った梁。家の造りが豪華であることを示している。この詩は、叙景詩というより、権門におもねる人々の姿を風論したものであろう。

風雨口號

多病休登花外樓

一番風雨一番愁

脚泥燕子多情甚

小語依依傍玉鈎

多病 登るを休む 花外樓

一番の風雨 一番の愁ひ

泥を啣くみし燕子 多情 甚だし

小語し 依依として玉鈎に傍る

さまざまな愁いに心乱れて、花に囲まれた美しい高殿に登る気もしない。

風雨のたびに私の愁いも深まるばかり。

口に泥を含んだ燕たちは、いかにも情愛深そうだ。

小さな声で囁きながら、玉の止めがねに離れがたい様子で寄り添って留まっている。

○口號 即興詩。口まかせに作る詩。○多病 病気がちなこと。ここでは、心に多くの愁いを秘めていることを指す。この一句は、杜甫「登高」に「百年多病獨登臺」とあるのを踏まえたものか。○花外樓 花に囲まれた楼閣。○一番 一度。ひとしきり。○聊 口に含む。くわえる。○玉鉤 玉でできた止めがね。鉤とはL型の物を引っかけておくもの。

讀書口號

東風吹綠上階除
 花院蕭疏夜月虛
 儂亦癡心成脈望
 畫樓長蠹等身書

東風 緑を吹きて、階除を上る
 花院 蕭疏として、夜月 虚ろたり
 儂も亦 癡心にして脈望とならん
 畫樓に蠹を長ふ 等身の書

春風があたりを緑に染め上げるように、きざはしを吹き上ってくる。
 木の植えられた中庭には咲いている花がまだほとんどなく、夜の月が虚しくあたりを照らしているだけだ。
 私も一意専心書物を読む本の虫となろう。

この美しい高殿には、読書に熱中する私という本の虫が養われているのだ。

○東風 春風。 ○階除 きざはし。 ○花の植えられた中庭。 ○蕭疏 さびしくまばら。ここでは、花がほとんど咲いていないことを言うのであろう。 ○儂 われ、私。「儂」は「我」にあたる江浙地方の口語表現。 ○癡心 一つのこと集中すること。専心。 ○脈望 蠹魚が神仙という字を三度食うと脈望に変わるといふ。 ○畫樓 美しい装飾を施した高樓。 ○蠹 紙を食う虫。しみ。 ○等身書 書物の多いことを言う。「宋史・賈黄中傳」に「黄中幼聰悟、方五歲、其父玘、每旦令正立、展書卷比之、謂之等身書、課其誦讀」とあるのに因む。

春日偶占

春色依依映碧紗

窗前重發舊時花

燕兒去後無消息

寂寞當年王謝家

春色 依依として 碧紗に映ず

窗前 重ねて發く 舊時の花

燕兒 去りにし後 消息無し

寂寞たり 當年の王謝の家

春の景色が緑のレースのカーテンごしにぼんやり見え、
 窓の下には、去年と同じ花がまた咲いているわ。
 燕が去ってしまつてこのかた、何の音沙汰もなく、
 往事の王・謝の家であつた辺りも物寂しげな様子だこと。

○偶占 草稿も作らず気ままに作つた詩を指す。 ○春色 春の景色。 ○依依 ほか。ぼんやりと。 ○碧紗 緑色のレースのカーテン。
 ○舊時花 以前に植えた花。 ○當年 当時、往事。 ○王謝家 「詠燕」詩の注釈参照。

春草

草色満平蕪

春風次近甦

吹嘘須着意

莫使感榮枯

草色 平蕪に満つ

春風 次近に甦る

吹嘘 須く着意すべし

榮枯を感ぜしむること莫かれ

青々とした緑の草が草原一面に広がっている。

春風が吹くにつれ次々に緑が甦ってくるかのようだ。

春風よ、どうか心して吹いておくれ。

緑したたる春草に、秋になったら枯れてしまうことを感じさせないように。

○平蕪 雑草の生い茂った野原、草原。 ○次近 『秋女烈士遺稿』（長沙秋女烈士追悼會印行、一九二二年。略称「長沙本」）では、「次第」としている。次々にというほどの意味か。 ○吹嘘 ふつと息を吹き出す。 ○着意 心をとめること。留意すること。 ○榮 枯 榮えることと衰えること。

剪春羅

二月春風機杼勞

嫣紅染就不勝嬌

而今花樣多翻覆

勸爾留心下剪刀

二月の春風 機杼の勞

嫣紅 染め就らば 嬌に勝へず

而今 花樣 翻覆多し

爾なんぢに勸む 心を留めて剪刀を下すを

二月の春風がいま正に美しい花に織り上げる準備をしているわ。

夏になって濃い紅の花の咲く頃には、何とも言えず艶やかなことでしょう。

いまは花の姿形もさまざまに変化に富んでいる。

どうか心してはさみを使って美しい花に仕上げてくださいな。

○剪春羅 花の名。和名「がんび」。フシゲロセンノウに似た橙色の花を夏に咲かせる。花卉の縁にははさみで細かく切れ目をいれたような刻みがある。貝原益軒の『大和本草』によれば、「花四月二開ク色黄紅ナリ又白花アリ又色々アリ花ノ端人力ニテ剪リタルツクリ花ノゴトシ」とある。同じく貝原益軒の『花譜』では「二月にうふ」としている。○機杼 機織りの機械（機）と横糸を通す杼。転じて、機を織ること。なお、機杼は詩文を作る折の工夫の意でも用いられる。○嫣紅 あでやかな濃い紅色。○染就 染まりあがること。○翻覆 さまざまに変化すること。○留心 注意深くするさま。気をつけるさま。○剪刀 はさみ。○この詩は、花としての「剪春羅」と「春羅を剪る」という行為にかけて作られている。

喜雨漫賦

淵龍酣睡誰驅起

飛向青天作怒波

四野農民皆額首

名亭直欲繼東坡

淵龍 酣睡するを 誰か驅りて起こせしか
 青天に飛び向かひ 怒波を作す

四野の農民 皆 額首す

亭に名づくるに 直ただに東坡を繼がんと欲す

淵の奥深くで眠りこけていた龍を、いったい誰が鞭打ち目覚めさせたものやら。

龍は青空高く駆け上がり、激しい雨を降らせている。

四方の農民たちはみな額に手を当て干天の慈雨を喜んでいる。

この雨を記念して亭に名前を付けるとしたら、かの蘇軾に倣って命名するのがいいわ。

○『秋瑾年表』に拠れば、一八九五年の夏から秋にかけて、湖南省は旱魃に見舞われたという。この詩はその旱魃を救う雨が降ったあとに作られたものようである。（同書三七頁）○漫賦 気ままに口ずさんでつくる詩。○淵龍 深い淵に棲む龍。○酣睡 熟睡。ぐっすり眠り込むこと。○怒波 激しい波。ここでは大雨を指す。○四野 四方の草原。ここでは周囲の田畑。○額首 額手のことか。額手は喜ぶさまを言う。○名亭 亭に名前を付ける。蘇軾（東坡）が扶風にあったとき久しく旱魃が続いていたが、やがて大雨が降り、人々は大いに喜び、折しも蘇軾の官舎そばに建てられていた亭を「喜雨亭」と命名した故事に因む。（蘇軾「喜雨亭記」）○東坡 北宋の詩人、唐宋八大家のひとり、四川省の人。字は子瞻、東坡居士と号した。

春暮口號

春従何處來

春向何處去

杜宇儘催歸

問之無一語

春 何處いづこよ従り來りて、

春 何處いづこに向かひて去る。

杜宇 儘ことごとくく歸るうながを催し、

之に問ふに 一語も無し。

春はいつたいたいどこから來て

どこへ去つていくのだろう

空を飛ぶほととぎすは皆、早く帰るようにながしてる。

そのわけをほととぎすに問いかけてみても、一言の返事もないことだ。

○杜宇 杜鵑、ほととぎす。初夏に南アジアから東アジアに渡ってくる渡り鳥。この詩は、その鳴き声が一般に「不如帰」と聞き慣わ
 されていることを踏まえている。○儘 みな、ことごとく。ひたすら。

春暮

棟花風信亂吹衣

小倚圍欄對晚暉

燕子不來春已暮

桃花柳絮逐翻飛

棟花けんくわの風信 衣を吹きて亂す

小し圍欄しよに倚りて 晚暉ばんきに對す

燕子 來らず 春 已すでに暮る

桃花、柳絮、逐きそひて翻飛す

梅檀の花の便りを伝える初夏の風が衣を乱すように強く吹くこの夕べ

しばらくの間建物のぐるりを囲む欄干にもたれかかって夕焼けを眺めてみる。

燕がまだやってこないというのに、春はもう暮れようとしている。

桃花の花と柳絮が先を争うように風に吹かれてはらはらと散っていくことだ。

○棟花 おうち、センダン。センダン科の落葉高木。初夏に薄紫色の花をつける。○風信 風の便り、手紙。また、季節の変化に
 じて風が吹くこと。ここでは花信風、すなわち開花の便り。二十四氣（季節の区分）のうち、小寒、大寒、立春、雨水、啓蟄、春分、清
 明、穀雨の八節気をさらに二十四候に分け、それぞれの候ごとに花を咲かせる風が吹くとされることによる。花信風としては「梅花信」

が最初であり、「棟花信」が二十四番目の最後である。○小　しばらくの間。少しの間。○晚暉　晚照、夕日の光。○柳絮　柳の綿、春の末に盛んに飛ぶ、柳の種についた白い綿状のもの。○翻飛　軽やかに飛ぶさま。

注

- (注一) 本稿は、上海古籍出版社版の『秋瑾集』(一九九一年新一版)を底本とし、先行する郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集 箋注』(五八～五九頁、吉林文史出版社、二〇〇三年)および郭延礼選注『秋瑾選集』(人民文学出版社、二〇〇四年)を参照した。
- また、「秋瑾詩全釈初稿」(その一)でも述べたとおり、拙稿では、秋瑾の伝記的事実については、王去病・陳徳和主編『秋瑾研究叢書第二輯 秋瑾年表(細編)』(華文出版社、一九九〇年。以下「秋瑾年表」と略称)に依拠した。
- (注二) 前掲『秋瑾「秋瑾年表」三五頁。